

図書館展示を向上させる「発見と感動」の視点

- 歴史小説との類似性から考えたこと -

東北大学附属図書館工学分館 米澤誠

はじめに

展示の専門家である博物館や美術館に加えて、近年は図書館の展示活動が活発となっています。観覧者として様々な展示会を見た経験上、単に資料の書誌的事項の解説だけでは物足りないものがありました。その経験から私も、観覧者が知らなかったことを興味深く伝える展示、そして観覧者に何かを伝えるような展示ができないかと思い、展示会実施の際に工夫を重ねてきました。

そのような中、企画展「江戸の数学」での講演以来、親しくさせていただいている作家の鳴海風氏からの電子メールで、インスピレーションを与えられるということがありました。インタビューの中でも語っているのですが、江戸科学史を題材とした歴史小説家である鳴海氏に、ある編集者が次のように告げたというのです。

「特に歴史物・時代物というのは、発見と感動が重要だというのですね。歴史物・時代物は同時代のことではないですから、過去にこんなことがあったのか、こんな人物がいたのかという『発見』がなくてははいけない。しかし発見だけでは不十分で、小説としては『感動』がなくてははいけないのです」¹⁾

以来、歴史小説と同様に展示にも「発見と感動」が必要で、それを観覧者に与えることができるものがよりよい展示なのではないかと思うようになりました。この視点から、私たち東北大学のここ数年の展示活動とその成果を紹介させていただきます。

1 田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示

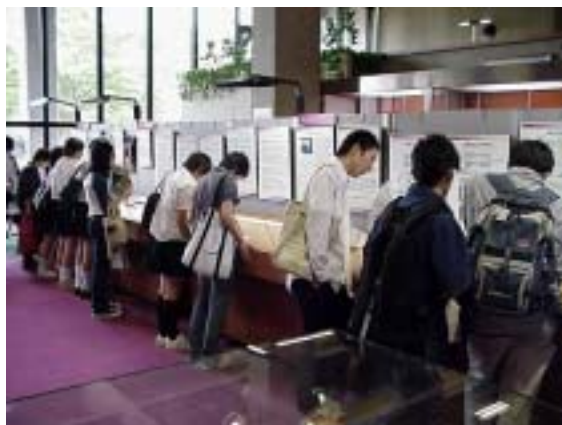
2003年7月から東北大学附属図書館本館（以下「本館」という）で常設展示しているこの展示会では、単に田中氏の業績を伝えるだけではなく、田中氏の経歴と業績から若い学生達に何かを伝えたいと企画を考えました。その結果、「マスコミで報道されるような興味本位の取扱

いはせずに、田中氏の研究内容を中心とする」、「研究内容を学生にも分かり易く展示する」、「展示内容から学生に意欲と勇気を与える」という3つのコンセプトで展示解説を作成することとしました。

研究内容を中心として分かり易い展示解説を行うためには、とにかく田中氏の論文をはじめとした関係文献を読みつくしました。そして、文系の私には厳しかったのですが、自分なりに田中氏の研究成果を咀嚼して、さらにそれを分かり易く図解で説明するという手法をとりました。数年前から自学自習し、仕事を進める上で有効な手法としていた図解術を大いに活用したのです。

学生に意欲と勇気を与えるためには、田中氏の研究のターニングポイントとなったエピソードを3つ、「失敗からの発見により、継続して努力することの大切さ」、「発表する努力により、公表することの大切さ」、「思い切って新たな環境に挑戦することの大切さ」をパネルにしました。

また、田中氏からいただいた学生に対するメッセージ「失敗を恐れない」も、学生に勇気を与える内容であり、全体として各方面からよい評価をいただくことができました。^{2) 3)}



オープンキャンパスで観覧する高校生

2 企画展 2004「江戸の数学」

2003年度から開始した、東北大学所蔵の和算資料のデジタル化事業の一つの成果として、2004年10月に「江戸の数学 - いま、和算がおもしろい!」という企画展を実施しました。この展示会では、今まで一般にはあまり知られていなかった「和算」というテーマを紹介する中で、様々な発見をしてもらえるよう資料の提示方法に工夫を凝らしました。

具体的には、資料そのものの解説を定型化して分かり易い分量としたこと、資料解説と本文解説を分割したこと、和算書そのもののほかに関連図書を展示したことなどがあげられます。また、解説パネルだけで単調となることのないよう、「にっちもさっちものいわれ」のような豆知識や、和算の数学遊戯パズルなどを作成し、和算のもつ面白さを演出しました。このような展示手法については、一関市博物館の和算常設展示が大いに参考になりました。^{4) 5)}

全体としては、和算というテーマを通じて江戸文化の見直しを行うような内容構成になったと思いますし、マスコミなどを通じて東北大学の活動を広く全国に知っていただくことができました。地元でも和算への関心が高まり、2005年からは仙台市で和算研究会が発足することとなりました。これも、人の心を動かしたことでないかと、密かに思っています。



関連書籍の解説パネルや数学遊戯パズルなど

3 アインシュタイン記念展示

2005年7月には、アインシュタイン特殊相対性理論誕生100年を記念して、東北大学の5キャンパスで「東北大学とアインシュタイン -

相対性理論誕生百周年記念展示」を開催しました。

アインシュタインが仙台、そして東北大学を訪れた時の写真などの資料や、アインシュタインの雑誌論文や関連図書を展示するだけではなく、アインシュタインの業績と意義やその人柄を知ることができるような展示構成を考えました。ちょうど、東北大学のオープンキャンパスに合わせた展示会であったため、高校生にも興味を持ってもらえるよう、岩波ジュニア新書『アインシュタイン 16歳の夢』をベースにして、物語風の解説パネルを作成しました。

解説パネルには、できるだけ興味を引くようなタイトルをつけるという工夫をしました。例えば、光の波を追いかけたらどうなるかという疑問を説明したパネルには「16歳の夢 - 相対性理論の原点」、相対性理論のほかに光量子仮説、ブラウン運動理論を公表したことを解説したパネルには「奇跡の年 1905年」、成績の悪かった大学時代を紹介したパネルには「秀才であるための特性」などのタイトルをつけたのです。また、学術研究活動の一端を知ってもらうためには「特許局での思考実験」「研究成果の伝播」「1905年論文の引用件数」などといった解説パネルも用意しました。

さらに、アインシュタインを身近に感じてもらえるよう「アインシュタインからの珠玉の言葉」というタイトルで、次のような言葉を紹介しました。

- ・「熱いストーブに1分間手を載せてみてください。まるで1時間ぐらいに感じられるでしょう。ところが、かわいい女の子といっしょに1時間座っていても、1分間ぐらいにしか感じられません。それが、相対性というものです」
- ・「何かを学ぶためには、自分で体験する以上にいい方法はない」
- ・「他人のために生きた人生だけが価値を持つ」

感想ノートへの記帳形式で観覧者の意見を聞いたところ、「研究者としての『志』を思い出した、とてもよい企画であった」、「『他人のために生きた人生だけが価値を持つ』という言葉が印象に残りました」、「今後もこのような展示をしてください」、「常設展にした方がよい」、「とて

もアインシュタインが好きになりました」、「アインシュタインの偉大さを再認識した」というような声が寄せられました。一つの展示を通じて、高校生だけではなく大学院生までの広い観覧者層に、発見と感動を与えることができたことに感動してしまいました。また、田中氏の展示に続いて、図書館が自然科学分野でも十分展示を行うことができると再認識しました。



アインシュタイン展示を見入る高校生

4 企画展 2005「江戸の食文化」

2005年11月に開催した企画展「江戸の食文化」の基本コンセプトは、前年開催の「江戸の数学」と同様に、江戸の文化を分かり易く、そして興味深く面白く解説することでした。解説の作成にあたっては、展示の各部を分担制とすることにより、解説を深くそしてより面白く充実することができました。また、手にとって見られる複製版を展示したり、関連書籍を読めるよう展示したり、質問に対するお答えメモや持ち帰りのレシピ集を作るなどの新たな工夫も加えました。スローフードジャパンとタイアップしたり、仙台市教育委員会や白松がモナカ本舗と共催できたのも、新しい経験でした。^{6) 7)}

広く興味を持ってもらえるテーマであったことと、展示会場や講演会場を市街地に移したことなどにより、例年以上の反響を集めることができました。それは、大変興味深く、分かり易い展示であったという意見が多数寄せられたことから分かりました。また、この成果によって、大学図書館が生涯学習にも十分寄与できると確信できたことは、大きな収穫でした。



「レシピ集」と「質問お答えメモ」



せんだいメディアテークでの記念講演会

そして、観覧者からの意見の中には、色々なかたちで心を動かすことができたことが分かる声が数多くありました。最後に長くなりますが、私が感激した言葉をいくつか紹介させていただきます。

アンケートのご意見から

・「意外な発見が沢山あって面白かったです。甘酒はもともと夏のものだったのですね。これから甘酒を飲むときは、このことを思い出したいと思います」

・「甘酒の作り方を見て、昔おばあちゃんが作っていたことをなつかしく思い出しました」

・「江戸時代の庶民の食文化を中心とした企画。現代人は見習うべきものが沢山あるように感じました。スローフードの大切さについて、もう一度考えてみたいと思います。とてもすばらしい企画でした」

・「人が人らしく助け合いながら生きていた時代が、江戸だと感じます。食を大切に、文化を

築いていた時代にタイムスリップしたくなるような思いがしました」

・「スローフードの時に生まれ育ったものとしては、現代の食が、あまりにも時間と労力を他の人にゆだね過ぎているのではと思いました。忙しさだけではないような気がします。一日、食事を作ることを考えることが、身体、心を考えることに通じるように思います。食べることは知ることです。ありがとうございます」

・「いつの時代でも食は大事であるという事。昔からの調理方法もなかなか参考になります。あつい料理はあつく、冷たい料理はつめたく、それがおいしくいただくのに、一番大切なこととしている私の考えと同じで、しきりにうなずいたことでありました」

・「大変なつかしい気持ちになりました。手間をかけて食事をつくらなくてはね。また我が家の味噌を手作りしたいと思います」

・「祖父が50年前認知症で亡くなり、最後に『豆腐の茶漬が食べたい』と言ったことを、おかしくも悲しい話として母達姉妹がしばらく語っておりました。でも本当に、『豆腐の茶漬』は存在したのですね」

さいごに

近年、欧米の大学および大学図書館では、その経営評価のための指標として、成果（アウトカム）という点に着目しています。これは、インプット（経費などの投入資源）やアウトプット（蔵書冊数・貸出冊数などのサービス統計数値）とは別の、サービスの結果としての成果を、アンケートや講習会の事前・事後テスト、利用者へのインタビューなどにより測定するものなのです。⁸⁾

展示会のアンケートは、展示会という図書館サービスの成果を収集するよい機会となります。利用者（この場合は観覧者）の生の言葉は、欧米では「アネクドテ・エビデンス（逸話的証言）」といい、成果評価の有効な指標として位置づけられています。私たちの活動を積極的に評価していただいたこれらの声を、図書館経営者や上部組織などに対して活動成果をアピールする材料にしなければならないと考えているところです。

参考文献・サイト

- 1) 鳴海風, NetRush「エグゼクティブ名鑑」,
<http://www.netrush.jp/netrush-archives.htm>
- 2) 米澤誠, 田中耕一氏展示という未知への挑戦, 大学の図書館, No. 378, 2005.5, pp.78-81
- 3) 東北大学附属図書館, 田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示「未知への挑戦」,
<http://www.library.tohoku.ac.jp/pub/michieno/michieno.html>
- 4) 米澤誠, 広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法, 情報の科学と技術, Vol.55, No.7, 2005.7, pp.305-309
- 5) 東北大学附属図書館, 東北大学和算ポータル,
<http://www2.library.tohoku.ac.jp/wasan/>
- 6) 東北大学附属図書館, 江戸の食文化電子展示サイト,
http://www.library.tohoku.ac.jp/main/exhibit/sp/2005/e-tenji/e-top_2005.html
- 7) 東北大学附属図書館報「木這子」, Vol.30, No.3 に関連記事を掲載予定
- 8) 永田治樹, 大学評価と図書館評価, 情報の科学と技術, Vol.55, No.12, 2005.12, pp.541-545